第 51 回全国衛生化学技術協議会年会　大分で開催 Rev3.7

企画調整主幹付　　宮原　誠

11 月 20～21 日大分県で全国衛生化学技術協議会年会が開催された. 本会の総会で本協議会会長の川西徹国立衛研所長は“国および地方衛生研究所のネットワークは国民生活の安全確保に必要不可欠なものであり，年会を通じて情報交換／意見交換をし、お互いに顔見知りとなり，強固なものにしていただきたい”と挨拶した.

全化協総会で挨拶する川西所長
大分 B-Con Plaza にて 2014 年撮影

本年の年会は大分県で開催された．全国の衛生試験研究機関から 299 人が集まった．食品、環境・家庭用品、薬事の各部門の一般演題数はそれぞれ 76、45、17 で、合計 138 であった.

総会で、本年会を主催した大分県衛生環境研究センター所長氏田尚之所長の開催の辞の後，挨拶に立った川西所長は、“国および地方衛生研究所ネットワークは国民生活の安全確保に極めて重要な役割を果たしており、衛生研究所で働く者が一同に会し、情報交換／意見交換するこの年会はネットワークを強固なものにするため重要です．ここにこうして皆様が集まった、この機会を利用してお互いに理解を深め、人脈を広げていただきたい”と本協議会年会への期待の一端を語った.

ご挨拶を頂いた来賓の大分県生活環境部長富高松雄氏は“本会で発表される研究成果は衛生行政上，極めて重要である”と行政から本会に対する認識を示した.

その後、25 年度の事業・会計・同監査結果、および以下が報告･提案され、承認された．①総会の発表内容に関するマスコミの取材は総会の開会から来賓挨拶まで許可、また特別講演とシンポジウムの取材については事前に事務局並びに演者の了解が得られた場合は認めることを会則等に定めること．②年会の一般演題に“優秀発表賞”を設け、来年度から実施すること．③次々回年会は青森県で開催予定であること.

次回第 52 回年会を主催する予定の静岡県環境衛生科学研究所山口英彦所長は挨拶の中で、次回は 12 月 3～4 日に静岡市グランシップコンベンションセンターで開催予定と述べた．最後に本会副会長の群馬県衛生環境研究所小澤邦壽所長が閉会挨拶を行い、総会は終了した.

続いて教育講演“薬事行政を巡る最近の話題”が厚生労働省保健局医療課の中井清人氏によって行われ，特に一般用医

薬品のネット販売を中心とした話題が取り上げられた.

続いて、食品部門と環境・家庭用品部門の一般演題の発表者による 1 分間プレゼンが、それぞれ 1 時間 35 分と 55 分間行われた.

特別講演は大分県産業科学技術センター齋藤雅樹氏にお願いした．同講演のなかで，大分は地熱発電開発が盛んで，フラッシュ発電（地下からの蒸気で発電機を回す)、バイナリー発電（温水の廃湯でフロンを蒸気に変えて、発電機を回す）さらに，大分独自のトータルフロー発電（噴出した温水・蒸気の両者で発電機を回す技術で現在実証研究中）など、地下の熱を利用する技術について大分には先進的な研究があり，政府が推し進める成長戦略関係施設として注目され，首相の視察もあったと説明があった．今後，騒音など，環境との調和が課題のようだ

２日目は各部門別に示説展示と部門別研究会が行われた．食品部門、環境・家庭用品部門、薬事部門に分かれて午後に行われた部門別研究会では、終了時間まで多数の参加者による活発な質疑・応答が行われた.

最後に，本記事作成にあたり，大分県環境衛生研究センターや市環境関係職員の皆様の懇篤なる協力に感謝します.

登録有形文化財　地球熱学研究施設　　B-Con Plaza にて撮影　2014 年

B-Con Plaza と道を挟んで隣には，大正時代に建てられた赤煉瓦の建物（写真　左下）があり，国の有形文化財に指定されている．これは　火山、地熱などの研究・教育を行う大学の施設であり，古くから地熱の利用研究が盛んであったことを示唆する．また，この地域では研究だけでなく，民間による自家発電施設として，地熱発電が 30 年ほど前から実際に行われている．さらに，地下 350mから噴出する蒸気（120℃）をクリーンなエネルギーとしてハウス内の暖房、土壌消毒、資材消毒に活用し，草花の栽培指導をしている大分県農林水産研究センター花き研究所などがこの地域にある.